



巻頭言

将来世代からのメッセージ*

—サイエンスの方向性と哲学を問う

Message from future generations

—Now is the time to establish a direction and a philosophy for science



林 勝彦 Katsuhiko HAYASHI

科学ジャーナリスト塾塾長・サイエンス映像学会副会長

22世紀、将来世代の人たちは現在世代をどう見るだろうか？そして今を生きる私たちはどのような社会を将来世代に引き継ぐことができるのだろうか？

温故知新。まず20世紀の科学・技術を振り返ってみよう。1901年、20世紀の幕開けにふさわしい最大のイベントは「第1回ノーベル賞授賞式」であった。この賞は化学者・技術者・実業家のA. B. ノーベルが、自身の発明したダイナマイトが戦争の道具にも用いられていることに心を痛め、人類の幸せを願った彼の遺言により創設された。彼の命日に化学賞はJ. H. ファント・ホフに、物理学賞はW. C. レントゲンに、医学・生理学賞はE. V. ベーリングに授与され、以後21世紀までに約800人が受賞している。

1992年、ユネスコ主催による「第1回科学ジャーナリスト世界会議」が東京で開催された。その際に世界28カ国、128人のジャーナリストへのアンケート調査が行われた。

表1 20世紀の重大科学・技術ニュース

1. 核爆弾の開発、広島・長崎への原爆投下 (1945)
1. アポロ11号月面着陸 (1969年)
3. 遺伝子の解明、二重らせん構造の発見 (1953)
4. コンピュータの発明と普及
5. 原子力エネルギーの開発

(日本科学技術ジャーナリスト会議調べ、6位以下は省略)

表2 20世紀の傑出した科学者・技術者

1. アインシュタイン (相対性理論の発表)
1. ワトソン、クリック (DNA二重らせん構造の発見)
3. フレミング (ペニシリンの発見)
4. ハイゼンベルグ (不確定性原理の発見ほか)
5. マリー/ピエール・キュリー夫妻 (ラジウムの発見ほか)
5. ボーア (量子力学建設への寄与)

この表からも20世紀は科学・技術の時代であったと言える。確かに先進国は豊かになり、物にあふれた。反面、現在世代の欲望と効率を最優先させ、俯瞰的・永続的な科学・技術という視点を欠いたがため、人類は負の遺産を抱え込むようになった。

“Sustainable Development”や“科学技術創造立国”のコンセプトは正しい。しかしこの言葉からは具体的な方向性や哲学は見えてこない。21世紀の科学・技術は、先端知の探求はもちろん必須だが、「将来世代」をキーワードに、①生命37億年の歴史をもつ“いのちの生態系”を崩さない範囲で世界一の技術と産業を開発し、国際貢献すること、②人類の生存に深くかかわる核・貧困・食糧・資源・地球環境問題などを解決していく方向へパラダイムシフトすることを望む。共生と循環の思想を離れ、母なる大地・大自然を忘れ、負債を将来世代にまわす科学・技術は美しいものではなく価値も低い——この時代意識を科学者や技術者自らも深めていく必要があると思われる。

哲学 (philosophia) の語源は“知を愛する”である。その知は西洋思想だけでなく、東洋思想にも「吾唯足知」「知行合一」「相和相生」など、学ぶべきものは多い。Scienceとは本来“学問”という意味で、自然科学だけでなく、社会・人文科学も含まれる。新発見と発明をさらに進め、学際知と哲学知を統合し人間・日本・地球が抱える課題を解決すること、これこそ将来世代が現在世代に突きつけているメッセージなのではないだろうか。

* このメインタイトルは、NHKクリエイティブ時代に京都フォーラムなどと公共性に基づき共同製作したビデオ「軍艦島と伊勢神宮」で使用した。

英訳版は503ページをご参照下さい。English version, see pp 503.

© 2010 The Chemical Society of Japan